日本における新水泳（フィン水泳）の現状

野村 武男，松崎 裕子
筑波大学体育科学研究水泳研究室

Present Studies on Modern Swimming (Fin Swimming and Underwater Swimming) in Japan

Takeo Nomura and Yuko Matsuzaki
Institute of Sports Science The University of Tsukuba
Sakura-Mura, Ibaraki, 305-Japan

はじめに
新水泳において、ヨーロッパの現状は、その規模、技術、機材、成績など、実に目をみはるるものがある。それに比べ、我が国の新水泳は、これらの点で世界的な水準と比較して遅れていることは、否定できない事実である。我が国の新水泳が世界の水準から大きくも遅れてしまった原因として以下のようなものと考えられる。従来から言われていることではあるがわが国は四方を海に囲まれているにも係らず、日本人は非海洋民族であり、そのうえ、内陸に目は向いている。海洋民族としての教育は極めて低く、幼時教育においても海洋というものがなければ、海と親しむというよりも、むしろ恐れが多いくらい環境で育っていることから、海とレジャーの場としてとらえることが出来なかった。そのため新水泳が競技として成立するための基盤が弱く、専門的な知識や、教育もされていないのが現状である。

そこで今回は、新水泳と呼ばれる新しい競泳の概念を明確にし、この分野の我が国の現状を略略説明し、ヨーロッパの現状を示し、さらに比較を行ない、この新しい新水泳の発展に寄与する資料とした。

1. 新水泳の概念
新水泳（MODERN SWIMMING）とは、CMAS (CONFEDERATION MONDIALE DES ACTIVITES SUBAQUATIQUES：世界水中活動連盟）の規則をとおり次のように定義付けられている。

new泳とは、フィン水泳（FIN SWIMMING）と水中水泳（UNDERWATER SWIMMING）の両者を、いずれの新水泳もフィン（FIN：足びれ）を使用し、競技者の筋力のみの働きによって水面または水中を進むものである。水中水泳においては、閉息潜水や高圧空気を充填した自給式潜水器を使用した新水泳も含まれている。

この新水泳により行われている競技には、次のようなものがある。
(1) ヨーロッパスタイルと呼ばれる新水泳の競技
1959年、モナコにおいて、CMASが設立されて以来、毎年ヨーロッパ地区において、新水泳の競技大会が開催されている。現在では、66ヶ国、約350万人のスープダイバーが登録され、そのうち56ヶ国、数万人がこの水中スポーツの祭典に参加するようになり徐々に大規模な競技会へと発展している。ヨーロッパスタイルと呼ばれるこの新水泳は、CMAS国際ルールのもとで、フィンを使用して、キックにより前進するものである。手の使用は自由であり、マスク、スノーケル、ウエットスーツや潜水機材の使用も種目によって自由である。
(2) 日本スタイルと呼ばれる新水泳の競技
1967年、全日本潜水連盟（Japan Underwater Diving Federation：JUDF）により、第1回水中スポーツ選手権大会（新水泳）が静岡にある伊豆海洋公園で開催されて以来、毎年のように全国の各地で行なわれている。またここ数年は、他団体主催の競技会も見られるようになった。現在、我が国国内におけるスポーツダイバーの登録人口は、約40万人とされているが、この中で、水中スポーツ競技会に参加する人数は、ほんのわずかである。日本スタイルと呼ばれるこの新水泳は、ヨーロッパスタイルをベースに改良したもので、フィンの使用が主である。
パスタイスト、多少の異なりをみせている。CMAS 国際ルールともとていていいるもの。フィンを使用して、キックのみにより前進するため、手の使用は認められていない。マスク、スノーケル、ウェットスーツなどの機材に関しても、使用しなければならないと規定されている。

2. 我が国の新水泳の現状

(1) 参加者

我が国の新水泳の人口は数千人、人口は約千人とわれており、これらは大きく分けて、(ア)大学のクラブ、(イ)スイミングスクール、(ウ)ダイビングスクールの3つに分類することができる。

a. 大学のクラブ

各大学のダイビングクラブ、またはサークルに所属している学生が、新水泳の競技会に参加するもので、現在、20大学約1000人が競技会に参加している。ダイビング活動の一環として、新水泳の競技会への参加を行なっている。

b. スイミングスクール

スイミングクラブに所属している学童によって構成されており、競技会には約500人が参加している。スイミングスクールでの競泳の練習の一環として、新水泳の競技会へ参加している。

c. ダイビングスクール

ダイビングスクールに所属するダイバーによって構成されている。独自にトレーニングを行ない新水泳の競技会への参加する人数約1000人ほどであり、ダイビング活動の一環として行なう。

(2) トレーニング

我が国の新水泳に関する研究は殆どみられず、トレーニングの方法についても、まだ確立されていないのが現状である。現在、代表的に行なわれているトレーニング方法は、競泳の陸上トレーニング、水中トレーニングに基づいて行なわれているが、新水泳独自のトレーニング方法は、いまだ不明確である。また、特定のサークルを除いては、計画的と連続的トレーニングは行なわれており、安全対策についても、今まだ不明瞭である。

(3) 競技

我が国で開催されている新水泳の競技会として、以下のようなものが挙げられる。

a. 全日本水中スポーツ選手権

全日本選手連盟(JUDF)主催の新水泳の競技会である。毎年、7月から9月にかけて各地で選考会が行なわれる。上位2名ないし3名が、10月に行なわれる全日本水中スポーツ選手権大会に出場することができる。種目は、男子、100m、400m、500m、女子、200m、300m、500m、男女ペディブリージング100m、リレー400m、水中重量上げがある。泳法は、日本スタイルを採用しており、大会の規模は、全国的なものである。

b. 学連競技会

関東学生選手連盟主催の新水泳の競技会である。毎年10月に、選考会が行なわれる。上位9名までが、一週間後に行なわれる当選手権大会に出場することができる。種目は、男子、100m、200m、400m、800m、1500m、500m、女子100m、200m、800m、200m、リレー400m、800mがある。泳法は、全日本水中スポーツ選手権と同様、日本スタイルを採用している。この大会の参加者は、学連加盟校及び連盟が参加を認めた学生団体と規定されている。

c. 海洋フリップレース

JUDF主催の、Open Waterの競技会である。毎年5月に開催される2.7kmを泳ぐもので、男女混合で行なわれる。泳法は日本スタイルを採用しており、距離のせいか、プールで開催されるJUDFの競技会よりも、参加者が多い。

写真1 フィンとモノフィン（右端）最近ヨーロッパを中心として開発されたモノフィンは従来のフィンとは全く異なり、イルカ、クジラのような動作で魚にかびしゃう近づいた泳ぎといえよう。現在100mの世界記録は（ソビエト男性）38秒50であり、これはClassic Swimmingで呼ばれる新水泳競技の49秒45で5秒ほど速く泳ぐことができる。
d. その他の競技会

近年になってスイミングスクールや、ダイビングスクールにおいても、独自に新水泳の競技会を開催するというような動きがみられるようになった。種目や泳法、開催時期などは、各団体、まちまちである。

(4) その他の事項

a. 使用機材

我が国の新水泳競技会では、フィン、マスク、スノーケル、ウェットスーツの着用が規定されている。これらの機材は各メーカーから、様々なものが開発されているが、競技会にて使用されるタイプは、大きく分けると、どれも一種類である。フィンは、大きさ、形状、硬度は人によってまちまちであるが、ゴム製のフィンを使用している。マスクは、一眼型のものを使用しており、鼻まで覆われたマスクである。スノーケルは、顔面の側面を通過するゴム製のものであり、人によっては、排水弁をつけている場合もある。ウェットスーツは、ネオプレーンゴム製で5 mmあるいは3 mmの厚みのものを着用する。

b. 審判

審判は、スピードの判定と着順の判定を行うのみで、フォームに対するものについての審判は行われない。審判員に対する資格テストや認定証等の規定は特になく、各競技会においては、その競技会役員がルールに基づいて、主に審判を行う。

c. 安全対策

競技会を安全に遂行するために、各競技会においては、独自の安全対策がとられている。競技会参加者は、医師の診断書を必ず提出しなければ、競技会に参加することはできない（JUDFの競技会においては）等の対策がとられている。競技中の突発事故発生の際、安全を確保するための措置や、事故処理に関しては、明確な規定はみられない。

3. ヨーロッパの新水泳の現状

(1) 参加者

ヨーロッパの新水泳人口は、数万人といわれている。それらのほとんどは、新水泳チームに所属し、新水泳を行うことを目的として、トレーニングを行ない、ヨーロッパ各地で開催される競技会に参加している。

(2) トレーニング

ヨーロッパにおいては、新水泳に関する研究が、理学、体育学などの各分野にわたって行なわれている。そのために、トレーニング方法も、新水泳独自のものが多く考案され、実践されている。トレーニングは、9月から、翌年8月までを、1シーズンとして、陸上、水中トレーニングを新水泳専門のコーチの指導のもとで、新水泳の競技会にあわせて、計画的、継続的に行されている。また筋力、持久力等の向上を測るために、他の種目の競技会（マラソン、サイクリング等）への積極的参加がみられることも、特徴として挙げることができる。

(3) 競技

ヨーロッパで開催されている新水泳の競技会は、以下のように分類される。

a. International Competitions（国際大会）

b. Continental Championships（大陸選手権）

c. World Championships（世界選手権）

これらはCMASの年中行事として組み込まれ、CMASの後援をうけながら開催される。CMASによって認められた全ての競技者に参加資格が与えられ、正式な登録を行えば、その競技に参加することができる。プールで行なわれる新水泳の種目は、男子、女子とも100m、200m、400m、800m、1000m、1500m、1850m、400mリレー、800mリレー、があり、大陸選手権、世界選手権においては、男女、100m、200m、400m、800m、1500m、400mリレー、800mリレーがある。また、Open Waterでの新水泳競技は男子3000mから2500m、女子3000mから8000mまでの競技が行われる。プールで達成された記録は、CMAS公認となるが、Open Waterで達成された記録は登録されない。泳法は全てにおいてヨーロッパスタイルを採用している。

(4) その他の事項

a. 使用機材

プール及び、Open Water（プール以外の場所で競技を行うもの、特に海、湖、川である。）における新水泳の競技は、CMAS国際ルールにもとづいて行なわれる。以下のように機材の使用が認められている。

イ. フィンの大きさ、材質についての制限はないが、フリッパー部と、足を入れる部分だけで構成されているものでなくてはならない。

ロ. 水中で眼を守り、視界を良くするためにのみ、ゴーグルやマスクを使用する。

ハ. 流線形のお迎えのない、呼吸を行なうためにの
4. 考察

(1) フィンの使用について

我が国では、ゴム製のフィンが主流になっているが、
ヨーロッパでは、グラスファイバー製のモノフィンが主
流となり、モノフィン使用者が、競技会での上位を占
め、その記録も、日本のそれとは比較できないほど速
いものである。ヨーロッパで使用されているモノフィ
ンの大きさ、形状、硬度、そしてフィンの動作を、そ
のまま日本人の体格に当てはめて考えた場合、必ずし
も、それらを駆使できるとは考えられない。しかし、
ヨーロッパでは、新水泳について、様々な角度から研
究が重ねられており、我が国においても、フィンの大
きさ、形状、硬度に関しての、研究が行われ、日本人
の体格にあったフィンが出現していくことが、今後
強く望まれる。

(2) ナチューリングについて

新水泳の競技会において、日本選手が、ヨーロッパ
の選手と同等に戦うためには、泳法等において急速か
つダイナミックな新水泳のナチューリングの開発が必要
とされるであろう。その際、どのような段階で、どの
ナチューリングの要領を決めていくかは、ヨーロッパの
それを参考にして、研究しておくことが必要であると
思う。

(3) 安全対策について

我が国の安全対策は、ヨーロッパに比べると、
不十分な点が多いことに気付くであろう。特にヨー
ロッパでは競技中、専門医を待機させるなど、万全の
処置がとられている。これは我が国においても、ぜひ
守るべき点であると考えられる。水中水泳競技では、
常に人命の危険がつきまとったものであるから、安全対
策には、充分すぎるほどの配慮が必要である。

(4) その他

審判制度の確立、即ち、審判員は一定の資格を持ち、
審判項目も、スピードのみならず、フィンスイミング
全般に渡る審判となるように研究される必要がある。
文献

(1985年6月10日受付)